

勝林寺寺報

安楽無量の 大菩薩



一生補処にいたるなり
普賢の徳に帰してこそ
穢国にかならず化するなれ

お浄土に生れた人々は、みな「一生補処」という位の菩薩さまです。
ところがその菩薩さまたち、如来さまのお慈悲のはたらきに随がつて、お浄土にありながらも生死煩悩のこの濁世(じよくせ)に還つてきて、有縁の人人を濟度なさるのです。

これがこの和讃のおおかたの意味です。
「一生補処」ということを調べたついでにちよつと道草をしてみました。
よく似たことは、「一生懸命」を調べてみると、こんなことがわかつてきました。

「一所懸命」と書くのが本来です。これは中国にあつたことばではなくて、日本の中世につくられたことばのようです。
主君なり領主なりから与えられた一つ一つの領地(封土)を、命をかけて守る、そのことを言つたものです。のちに「一生懸命」と当て字をしましたが、その場合もやはり、一生の間一つことを守り通すという気持でつかわれてきました。そして、そういう生き方が家人(けにん)武士のみならず人間の正しい生きかたとして、少くとも日本では言われてきたわけですね。

一つのことばに命を懸ける。
これはたしかに私たち人間の生きざまであらうと私は感じ入りました。
「とらわれ」であります。
「こだわり」であります。
我に、我がものに、こだわりとらわれるところ

で、私のくらしが成り立つていると言えます。そしてその「こだわり」「とらわれ」から、悩みや苦しみや、いら立ちや争いが生れてきているように思えます。

親鸞さまの出られた時代からこのことばは使われたと聞けば、親鸞さまは、世の中の、この「とらわれ」「こだわり」のなかを、どのように苦しみに生きてゆかれたのだろうか、あらためて問うてみたい気がしました。

「一生補処」とは、これとは全く違つて、すでに如来さまの命のなかに生れかわり、如来さまと同じいのちを生きる「如来さまの子」「等正覚」「たとえは次の如来ミロク様と同じ」くらいに菩薩さまを言うのです。
お浄土に生れた私たちは、みな一生補処の菩薩さまにしてくださいませ。(つづく)

宮嶋 千秋

いつもお参りしてもなかなかお出会ひできないご院さまに、過日は久しぶりにお出会ひしてうれしく思いました。
その時に、私の村に掲示をすることをばをいただきました。ワザワイハ ナオ サクベクモ
「天ノナセル ワザワイハノガルベカラス。」

これは、自然の災害ということと、自分の業(ゴウ)というかと、責任ということとを比較して考えられておると思っています。

「自分」の時お借りしているものであつて、決して現世の生涯を無数の不可思議なご縁にめぐまれておられます。また後世へおつていかなければならぬ

葬儀

五月十四日

出石町

小島 小市 様

ないものではない、自分のものを終えたとき、これらのものを自分のものとしてかかえこんで持つていけるもの、自分のからだであつても、自分のものではありませぬ。お聞きかせただく「仏法は無我」ということ、お聞きかせただく「責任の重大なからだであること」を思ふのでございませぬ。
今の私には、お金こそありませんが、丈夫なからだ、お聞きかせただく「責任の重大なからだであること」を思ふのでございませぬ。
「自分」の時お借りしているものであつて、決して現世の生涯を無数の不可思議なご縁にめぐまれておられます。また後世へおつていかなければならぬ



六月のこよみ

- 一日 出石組仏教連盟役員会・評議員会(勝林寺)
- 三日 兵庫教区布教団総会(神戸)
- 四日 浅原寺市翁顕彰法要(温泉津町)
- 五日 西宮寺法事
- 七日 教区企画室会議
- 八日 全国布教団研修会(本山)
- 十一日 官嶋文夫氏法事・本覚寺永代経
- 十三日 本覚寺永代経
- 十四日 出石組仏教連盟総会(勝林寺)
- 十七日 森友 強氏法事・但馬寺族婦人研修会(真光寺)
- 十八日 阪神地区寺族婦人研修会(神戸)
- 十九日 福成寺永代経
- 二十一日 奥田雄雄氏法要・永井誠一氏法事
- 二十三日 御門王様東京教区巡教随行
- 二十六日 白線会追悼会(京都)
- 二十七日 善立寺永代経法話
- 二十八日 真覚寺永代経・永井道則氏法事
- 二十九日 三十一日 地区別仏教研修会

六月十四日

今年には勝林寺を会場にして開かれます。一人でも多くお参りください。
前九時半 総 会
前十一時 追 悼 法 要
後一時 同 朋 講 座
ご法話 兵庫教区教務所長 徳川 英範 先生



今月「みのりを聞く会」は、
住職の都合で
二十二日(月)にします。



三つのコンダクトレン



わたしは本来不器用なんでしょうか。それとも眼の質が特別わるいのでしょうか。

五・六年前から、コンダクトレンズを朝はめて夜床に就く前にははずす、そんなくらしをしているのですが、そのコンダクトレンズがなかなかうまくはまらなかつたり、ときには昼なか突然ずれてしまったときなどには大変であります。

猛烈に痛んで涙がワツと出て、一瞬にして、ものけじめもあやめも、何も彼も見分けができなくなってしまうのですから。

だからつまり、朝は毎朝、今日はコンダクトがうまくはまつてくれればいいかと案じ、また昼は昼なかじゆう、またずれたらどうしようかとずつと思いつくおし案じどおしているわけです。

それだけに、そんなやつかいな一日が終つて床に入る前、コンダクトをはずして、だから本当にホツとするのです。なんとということもない床のなかが有難いのです。

『ご文章』（蓮如上人のお手紙集）には、「心得顔」・「もの知り顔」・「わがみあり顔」という三つの顔が言われております。

そう言えば私たち、「心得顔」・「もの知り顔」・「わがみあり顔」の我慢・高慢のコンダクトレンスをはめて、今日の一、この一生を、がんばって生きてきたのではないかと思います。

でも、そのがんばりには、いつも不安と懸念がつきまといつておりました。

はずれはしないか、突然見えなくなりはないか、痛んで涙がワツと出はしないか。

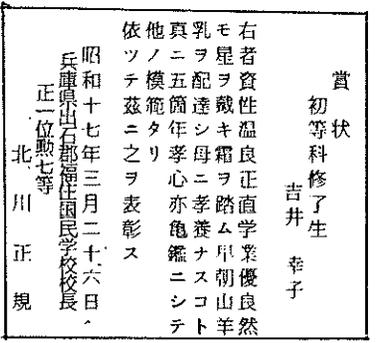
夜、そのコンダクトをはずして床に就いてみてわかるのです。見えなくても、まつ暗であつても、今さら、うそ・いつわり・へつらいの「心得顔」「もの知り顔」「わがみあり顔」をしなくてもいい床の中の有難さもつたいなさを、私はつくづくかみしめるのです。

お念仏は、「世の盲冥（せのみやみょう）」

会者定離 生者必滅 宮嶋 幸子

わたしの生い立ち

私の旧姓は吉井幸子と申します。当時室埴村鍛冶屋宇清水で生れたのでございます。懐かしい思い出の賞状



賞状 初等科修了生 吉井 幸子 右者資性温良正直学業優良然...

今に思いますのに、大変苦勞の様子に思われまが、私にとつてはよい思い出ばかりが残つております。すでに申しましたが、大人の方との出合のなかで、いつも優しい励ましのことばをいただいたこと、今は亡くなつてしまつてはいる方の多い中で、うれしかつたことばの教々が、はつきり思い出されてくるのです。

「感心な子なんだ、朝早く起きて山羊の乳を配達しておくれんさる。ごころうさん、ごころうさん」

「うちの子は、まだ夜中の夢で寝ているのに、ありがとう、ありがとう」

反対に私にお礼を言わなければなりませんのに、転車のベタルも軽く配達したことでした。

月末には、母が便箋を四つに切つて請求書を書きます。それを渡してお金をいただくのですが、当時一合が九銭で合計二十七円であつたと思ひます。一か月の配達がお金に替つていただいた時の満足感、ほんとは働いてよかつたと思ひました。その上まだ手作りのおやつまでくださる家があり、二重のよるこびでありました。集金してきたお金をお母さんに渡しますと、母は合掌しお供えしてから生活費に充てましたようです。

遠足には、真さらの運動靴を買つてもらつたことも、キヤラメル箱入りを買つてもらつたことも楽しい思い出の一つでございます。

もう一つ、祖母が心して私を育ててくれたことでございます。

何も見えない私に、「そのままでいいのだよ」とまるごと包み取つてくださる、親の慈悲の床であるのですか。

にわたりの放し飼いの小屋の中で、しきりと私が先生の真似をしていたそうでございます。鶏を相手に手をたぐき、学校ごつこをやつていたのを見て、この子は先生になる素質をもつているといふ判断から、鶏を十羽から三十羽五十羽と増し、毎日鶏の飼料の切り菜作りが大変でございます。わたしのおばあちゃん、ほんとに考え深い人で、孫である私の遠い将来をも見抜いてくれる賢い人であつたように思われ、感謝せずにはおられません。



積尊の生涯

積尊の生涯 最初の説法 教えを説く相手 求めた旅に出られた積尊は、ガヤの町を過ぎ、道に西北にとつてガインジス河を渡り、その町は野野（ろくやおん）に着かれました。ここはマンゴリーなど、鹿がたくさん住む美しい静かな森です。

積尊は六人に対して説かれました。「この世に生れてきた限り、人間はすべて老い、憂い、汚れ、死ぬものである。何故か、この世に存在するものは、すべて因縁によつて生れ、因縁によつてうつろひ、變つてゆくものだからである。今のまゝの姿でいたいといふなら願つても、しよせんそれは無理なことである。しかかわらず、ある人は、その無理なことにがみついて、あくせくし、もたえ、悩み、愚かな迷信にしがみついている。他の人々は、今だけの瞬間的な快楽に身をゆだねている。しか

積尊は六人に対して説かれました。「この世に生れてきた限り、人間はすべて老い、憂い、汚れ、死ぬものである。何故か、この世に存在するものは、すべて因縁によつて生れ、因縁によつてうつろひ、變つてゆくものだからである。今のまゝの姿でいたいといふなら願つても、しよせんそれは無理なことである。しかかわらず、ある人は、その無理なことにがみついて、あくせくし、もたえ、悩み、愚かな迷信にしがみついている。他の人々は、今だけの瞬間的な快楽に身をゆだねている。しか



しこれらはどちらも、悩みやわずらいを深めるだけでしかない。人間が、ほんとのしあわせに到達する道、それはあらゆるものに対する欲望をすてて、自身に対する執着（しゆうじやく）をもすてて、静かに淨らかに生きることである。」

（豊原大成先生の著書より）

シヨウガ湿布 シヨウガは天平の昔に中國から招來されてから大切な漢方薬として使われてきました。胃がつかえて食欲不振のときは生シヨウガを食べます。煎じた汁を飲んでもよく、乾いたシヨウガの粉末をなめてもよろしい。腹痛にはヘソの上にシヨウガをしいて上から灸をすえます。古くやつたヒネシヨウガの方が薬効はあります。シヨウガ湿布の仕方。明大のヒネシヨウガをすりおろして布ぶくろに入れ、鉄製の容器に水二升ほどを微温湯にして、しばらく出します。ぶくろを入れたまま温度を上げ、摂氏八十五度のあつたお茶程度になつたら、温度を保つように火力を調節します。決して沸騰させてはいけません。そこへタオルを浸し、両端を持つてしぼります。しずくが垂れない程度に軽くしぼります。火傷をしない用心をして患部にあてます。上から古い布などをかぶせ熱の逃げない工夫をして下さい。冷めたらまた次のタオルと交換しこれを何度も繰り返します。二十分程して患部が赤くなつたら止めます。首すじ、肩、背中のかたりや痛みをはじめ、内臓の痛みにも、血の循環を促進して効果があります。